

第105回 東葛しぜん観察会

夏の虫をじっくり観察しよう

藤田 隆 (松戸市)

日 時：2014年8月3日(日) 9時30分～12時
場 所：21世紀の森と広場(松戸市)
参加者：41名(うち子ども22名)、指導員20名
担当指導員：草野、長谷川、藤田

11時15分にファールポイントまで戻ってくると虫ケースに入ったカブトムシを触ったり、図鑑や絵本を広げました。靴を脱いで座れるスペースはオープンな子ども図書館的スペースになっていて、ファールポイント担当のアイデア勝ちだと感心しました。

カブトムシを虫ケースから出して手渡ししていると、「飛ばないんですか」とびっくりしたように聞かれました。「飛びますよ」といったのはいいのですが、「どうして飛ばないのでしょうか」と付け加えるのを失念しました。目の前まで来てカブトムシに触れない子どももいましたが、とても興味があるのはわかりました。

面白かったことを聞いたところ、「オニヤンマ」と答えていました。オニヤンマは偶然の大収穫でした。シオカラと比べて「大きいね」と感激しきりでした。子どもたちの目が輝いていました。

別の小学校2年生はよく虫のことを知っていました。川のへりでシオカラトンボを網に入れると、「シオカラのオス。メスは黄色だよ」とお母さんに教えていました。「そうなの」とお母さんがわが子の知識にびっくりした様子でした。

虫かごに放ったシオカラトンボをみんなで観察しました。物静かで無口だったお父さんは5歳と3歳の女の子の面倒を見ながらの参加でした。「シオカラトンボのオスとメスでは色が違うことがわかった」とふりかえったのを聞いた時には、大人の参加者にも記憶に残る観察会になったのだという思いを強くしました。

川原ではショウリョウバッタ、ツチイナゴ、コバネイナゴが網にかかりました。プラカップを持った就学前の5才2人、3才1人は虫とりに挑戦するのですが、なかなか捕まえられず、小さなキリギリスの幼体がカップにおさまりました。この子たちにとって虫とりは成功したのではないかと思います。

あまり関心を示さなかったお母さんが書いた「オニヤンマがシオカラの2倍の大きさだった。楽しい観察会をありがとう。また参加したいです」というアンケートを渡してくれた時には感激しました。子どもたちからは「セミがカラカラと鳴いていた」、「大きなアリを捕まえた」、「ナガコガネグモの巣にはメスだけ」という「発見したこと」もありました。

用意した虫クイズは4種類のうちバッタとセミの「私はだーれ?」「食べ物は何?」を聞きましました。クイズ自体は簡単すぎた感はありますが、目の前を通るムシを見つめるだけで観察会になるとあらためて思いを強くしました。

